

校内研修報告書

研修者	上野昌生
分掌・教科名	進路指導部
研修期間	平成26年8月23日（土）～8月24日（土）
研修場所	東京都渋谷区（代々木ゼミナール本部校）
研修テーマ	東京大学（前期）入試問題と再現答案の分析をもとにした、学習指導のポイントについて
主な研修内容	・国語科、英語科、数学科の講師から各教科の分析をもとに、指導のポイントの講演 ・東京大学 福田副学長の講演「東京大学の教育改革と入試改革について」

研修報告

<第1部>

2014年 東大(前期)入試問題・再現答案の分析からみた生徒指導のポイント

(1) 代々木ゼミナール 数学科講師 湯浅弘一

◆再現答案から見た東大受験生の問題点とその改善について

ア 問題点1 論理の飛躍がある答案が多い

→指導の改善：題意を大まかにしか捉えずに、その段階ですぐに解きたがる傾向がある。じっくりと条件を吟味するのを嫌う生徒が多い。場合分けを必要とする問題の演習を積み重ねて、論理性を高めることが必要である。

イ 問題点2 題意がつかみづらい問題で、状況を把握し自分で立式する力が足りない

→指導の改善：解法が何通りかある問題に対して、生徒同士に話し合いをさせながら、試行錯誤して考えさせる経験を積ませる。

ウ 問題点3 解法の選択が適切でない

→指導の改善：過去問の類題は、解いたことがあるという安心感がかえって危険である。日頃の添削指導においても解法のパターンに当てはめて解こうとさせないように、下書きと答案用紙を配布し、いくつかの解法で下書きさせてから解答させるなどして丁寧に取り組ませる必要がある。

エ 問題点4 典型的な問題の解法が身につけていない。

→指導の改善：まずは確かな計算力を身につけることが重要。本年度の第3問のような、かなり計算量の多い計算問題がしばらく続くと考えられる。東大受験生であっても計算力が不足している生徒が少なくない。

(2) 代々木ゼミナール 英語科講師 西川彰一

◆東大志望者に対する教科指導上の留意点について

ア 遅読速解

東大英語は問題分量の多さから試験時間内に解くのは厳しい。大量の問題を短時間で処理しなければならぬために、「速く読もう」と焦り、問題文の意味を正確に理解できないまま解答している再現答案が多く見受けられる。一文一文の文構造を正確に把握して適切な日本語に訳して考えていくことを疎かにして、英文の内容が理解できることはあり得ない。3年生の夏頃までにこの精読の力をどれだけ完成させられるかが、東大に限らず難関大英語を解くためのカギとなる。

英文を1分間に30字程度の速度で丁寧に読ませ、しっかりと文章を理解させることを心がけている。その上で素早く解答を導く演習を行っているが、速解の具体的指導の一例としては、要約の問題などで解答を作成する際にクロスリファレンス（相互参照）をさせない指導である。つまり解答を書きながら並行して問題文を眺め、英文を写すような解き方はさせないで、頭の中で文章を整理したらそれを瞬時に書かせる指導を徹底し、速く解く力を身に付けさせている。

イ 選択肢には頼るな

記述式問題と選択式問題を区別しないで指導している。選択式問題であっても、選択肢に頼らないで自分で考え、自分の言葉で表現する姿勢が大切である。選択肢から選ぶとすると、誤解して見当違いな答案になってしまうことがある。しっかりと論理の下で、解答できるように指導することで、間違った場合でもそれを次回に生かすことが出来る。

(3) 代々木ゼミナール 国語科講師 藤井健志

◆再現答案から見た東大受験生の問題点とその改善について

ア 問題点1 本文の安易な抜き書きに頼り、重要なポイントが欠落している

→指導の改善：安易な抜き書き答案では、ポイント不足に陥るケースが多い。まず①書くべきポイントを適切に抜き出し、②その後にそれらを効果的に組み立てる、という二段階の作業を確実に行うことが必要である。

イ 問題点2 段落間のつながりが正確に理解できてない

→指導の改善：複数の段落間の意味のつながりが正確に読めているか、形式段落を幾つかの意味段落にまとめて理解することが出来るか、といった点が合否を分けるポイントとなっている。文理共通の第一問の設問(二)、(四)など。

ウ 問題点3 全文の要約問題と傍線部説明問題の区別がついていない

→指導の改善：120字の説明問題では本文の要約のニュアンスが含まれるのは事実であるが、「最後の問題は要約だ」と安易な決めつけや先入観を持たないようにする必要がある。本文内容や設問の指示から主体的で柔軟な判断が行えるよう指導する。

<第2部>

特別講演「東京大学の教育改革と入試改革～世界で活躍できる人材を育てるために～」

講演者：東京大学副学長 入試企画室長 福田裕穂 先生

◆講演内容

(1) 急激なグローバル化

かつては、一部の商社マンだけが海外で活躍し、日本の研究者たちもアメリカを中心に職を得て活躍していたが、現在では、町工場の従業員から大企業のサラリーマンまでが海外で現地の人と一緒に活動し、日本の研究者は中国やシンガポールなどアジアの大学でも活躍している。また、アメリカの多くの大学教授陣で中国人が激増し、アジアの急激な成長が顕著となっている。

(2) 東大の教育理念と重点テーマ

このようなグローバル化の中で、東京大学は国際性と開拓者精神をもった各分野の指導的人格を養成することを教育の目標としている。重点テーマは「タフな東大生」の育成である。

(3) 改革の3つの柱

学部教育の総合的改革の3つの柱「国際化」、「実質化」、「高度化」に沿って、様々な取組を推進する。

ア 体験活動の推進

イ FLY（初年次長期自主活動）プログラム

例：文Ⅱの学生が釜石市でインターンシップ生として地域振興事業「釜石隊」を担当
→この活動を通して多様な人との出会いで刺激を受け、将来を考える機会となった。

ウ GLP（グローバルリーダー育成プログラム）

→国際社会における指導的人材を育成することを目的とした特別教育プログラム。トライリンガル・プログラムなど高度で多様な語学教育を実施

エ 4ターム制

→平成27年度に全学部で導入。長期の休業期間を設けることで、海外のプログラム参加がこれまで以上に参加しやすくなり、ターム単位での留学も可能。海外の大学院への進学も今後増えてくと期待される。

オ 推薦入試

- ・ねらい：自ら課題を発見し、創造的に解決できる人材を見出し育てる。ペーパー試験では測れない生徒の潜在的多様性を掘り起こす。
- ・期待される学生像：誰にも負けないくらいの興味や関心を持っている分野があり、大学ではとことんそのことについて勉強したいという強い意欲のある学生。入学試験の得点だけを意識した視野の狭い人でなく、世界に目を向けることのでき、将来世界で活躍したいという広い視野と積極性を持つ学生。
- ・推薦の要件：学部ごとに異なるが、自分で探求したエビデンスが求められる。
- ・入学後の学修：推薦入試のねらいで示たとおり、人材育成にも力を入れている。アドバイザーのもとでの学習指導など充実した体制をとる。

今後の本校での指導改善に向けて

◆東大数学の指導

東大数学の出題意図は、答案を通してコミュニケーション能力をみるとあり、東大志望者に対する添削指導を工夫改善し、答案作成能力を向上させていきたい。添削指導に当たっては、1つ1つの問題を一度解いたままで終わらせず、徹底した復習を行わせ記述力を向上させる。答案の状況によっては、再提出させて書き直した答案を改めて添削するなどして、一度自分が犯したミスを踏まえて、同じミスをしないように、より完成度の高い答案を作る経験を積ませて、丁寧な指導に努める。

◆東大英語の指導

東大の読解問題で出題される英文は多彩である。普段から論説、評論、小説など様々なジャンルの文章に日頃から触れさせて読解力を養成する。その上で要約や内容説明問題を解く機会を設けて記述力を身に付けさせていく。要約に関しては、いきなり70~80字書くのが難しい場合については、10字で英文のタイトルを付けさせるなどして指導し、そこから徐々に長い要約が書けるように段階的に指導するなど工夫する。

◆東大現代文の指導

現代文の問題に取り組む際に、出題者と受験生と筆者の三者関係をしっかりと理解させる。本文は筆者から与えられたものであるが、設問は出題者から与えられたものである。したがって設問に対する解答は、本文に対して自分はどう考えるのではなく、出題者の意図を汲み取ったものでなければならない。

また、傍線部説明問題では、単に言い換えや本文の抜き取りではなく、具体→抽象や抽象→具体などを意識して指導し、主体的な表現意欲の感じられる答案となるように指導する。

◆東大推薦入試に対する本校の対応

低学年で実施する難関大志望者ガイダンスを通して推薦入試のねらいや概要を説明するとともに、科学オリンピックなど志望分野にかかわる各種コンテストへの参加や英検など語学検定への受検、その他社会貢献や芸術文化・スポーツなどでの意欲的な活動など様々な生徒の取組を奨励し支援する。